

令和3年度新潟県病虫害発生予察情報・特殊報第2号
(トルコギキョウ斑点病の初確認)

令和3年8月24日
新潟県病虫害防除所

1 病虫害名 トルコギキョウ斑点病

2 病原名 *Pseudocercospora nephroides* (= *P. eustomatis*)

3 作物名 トルコギキョウ

4 発生経過

(1) 令和3年5月に、新潟県のトルコギキョウ(施設栽培)において、施設(ハウス)1棟(約200㎡)で葉にすす状の斑紋が認められた(図1)。新潟県農業総合研究所園芸研究センターで罹病葉を検鏡したところ、分生孢子(図2)の形態から *Pseudocercospora nephroides* による、本県未発生の「トルコギキョウ斑点病」と診断された。

(2) 本病は平成20年に福岡県で初確認され、令和3年7月20日現在、22県で確認されている。

5 本病の特徴

(1) 発生初期では、下位葉に5~10mm程度の退緑斑紋が確認され(図3)、上位葉に進展する。その後、退緑斑紋上で小黑点(分生子座)が多数形成され、灰色~黒色のすす状の病斑が生じる(図4)。このすす状病斑を顕微鏡で観察すると、分生孢子の形成が確認される。

病斑は下位葉を中心に発生するが、まん延すると上位葉へと進展する。

(2) 品種により発病程度に差があり、他に比べ潜伏期間が長く発病が少ない品種が確認されている。また病徴には、

ア：分生子が形成されずに退緑斑紋のまま。

イ：すす状病斑ができるが退緑斑紋の部分が残っている。

ウ：退緑斑紋の範囲が全てすす病斑。

の3タイプがあるが、品種によってこれらの発生する割合が異なるとの報告がある。

(3) 本病は、盛夏を除きほぼ年間を通じて発生する。特に春から秋の多湿条件下で多発する。

生態や生活環についての詳細は不明であるが、育苗中および本ぼで発生し、病斑上に形成される分生孢子により感染する。

(4) 現在確認されている宿主植物は、トルコギキョウのみである。

6 防除対策

- (1) 多湿条件下で発生が助長されるため、施設内の換気を十分に行う。
- (2) 発病葉は見つけ次第速やかに除去し、登録薬剤（表）で防除を行う。耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる薬剤をローテーション散布する。
- (3) 発病が見られる株は二次伝染源となるため、発見次第ほ場外に持ち出し、土中深く埋める等、適切に処分する。



図1 ほ場での発病状況
(画像提供：新潟地域振興局農林振興部)

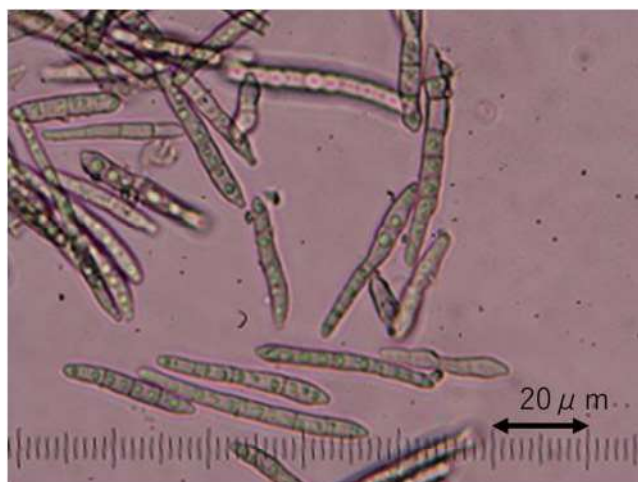


図2 病原菌の分生孢子
(画像提供：新潟県農業総合研究所
園芸研究センター)



図3 罹病葉の症状（退緑斑紋）
(画像提供：経営普及課 農業革新支援担当)



図4 罹病葉の症状（すす状病斑）
(画像提供：新潟県農業総合研究所
園芸研究センター)

表 トルコギキョウ斑点病に使用できる殺菌剤一覧（JPP-NET 令和3年8月1日現在）

作用機構 分類 (FRACコード)	薬 剤 名	使用方法	使用時期	本剤の 使 用 回 数	希釈倍率	散布液量
1	トップジンM水和剤	散布	—	5回以内	1500倍	100～300 L/10a
7	パレード20フロアブル	散布	発病初期	3回以内	2000～4000倍	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	散布	発病初期	5回以内	3000倍	
11	メジャーフロアブル	散布	発病初期	3回以内	2000倍	
19	ポリオキシシンAL水溶剤	散布	発病初期	8回以内	2500倍	
M5	ダコニール1000※	散布	—	6回以内	1000倍	

※花き類。観葉植物（ばら、きく、チューリップ、ゆり、りんどうを除く）で登録。

注1 使用に当たっては、使用量・使用時期・使用方法などを誤らないよう注意する。特に初めて使用する場合は、事前に葉害の有無を十分に確認してから使用する。なお、普及指導センター、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるのが望ましい。

注2 ダコニール1000は、花卉に付着すると漂白・退色等による斑点を生じる場合や収穫間際の散布により汚れを生じるおそれがあるので、着色期以降の散布は避ける。